

一般社団法人

日本助産学会ニュースレター



日本助産学会設立 30 周年を迎えて

日本助産学会理事長 高田昌代



高田昌代理事長

個人的には、30年前大阪で開催された第1回助産学会時に駆り出され、内容を聞くどころではなく、誰が誰なのかもわからず、そこにいた方々の思い入れがどれほど大きいかも知らないまま、大勢の方々のために椅子を運んでいたことを思い出します。この間正月だったと思えば、あっという間に入学式が来て、暑くなったなあと思っていると涼しくなって、気が付くとクリスマスと慌ただしく1年が過ぎていく私の助産師の生活と共に、日本助産学会は30年という節目の年を迎えることになり、学会として改めて今後を考えるよい機会と思われま

す。ここで立ち止まって考えなければならないことは、「これまでのこと」と「これからのこと」、そして「では今何をすべきか」です。

「これまでのこと」は挙げればきりがありませんが、やはり最も大きなことは助産学を立ち上げたことに他なりません。学会設立の7年後の1993年1月11日、日本学術会議会員推薦管理会議第16期第2回総会において、本会は日本学術会議・登録学術研究団体として承認されました。この学術団体として認定されることは、助産学の研究分野の地位が確立できたことを意味します。今では当たり前前に助産学と使ってい

ますが、本学会の設立がなければこの言葉さえ無かったと想像すると、先人たちの凄さがわかります。助産学会設立までは、複数の職種で設立されている日本母性衛生学会が助産師の研究の主なる発表の場でした。本学会の理念の中にあるように「専門職助産師の学術的基盤を体系化し発展させる」と、助産師の前に「専門職」を冠したことからその思い入れが読み取れます。「これまでのこと」でもう一つ挙げるべきことは、ICMへの加盟です。助産師は世界中に存在する職業人です。本会は第3回の本学会総会にて、ICM加盟の条件に適合していることの確認と会費額の提示がなされ、加盟することが承認されました。ICMは助産師に関する事柄を国際基準で考える組織です。ICMへの加入は、世界の助産師のこと、ひいては世界の妊産婦や女性、乳幼児を考えることであり、自国の課題も世界の中で検討できる場を持つこととなります。本学会はこれまでも何度もICM評議会で発言してきており、ICMの一員としての役割をはたしてきましたが、これはICMの設立早々から加盟していたことによるものと確信しています。最後に、何といたっても重要なことは学術集会の開催、学会誌の発行が定期的になされ、確実な成果をあげてきたことでしょう。

「これからのこと」を考えるにあたり、学会設立10年目、20年目の記録にある「今後への期待と課題」に目を向けてみました。そこには課題として、助産学教育の位置づけが明確ではないこと、助産実践能力の向上とバースセンターの定着、アジア太平洋地域の助産師との活動を密にすること、他の学問分野との交流を図り助産学の視野を広げることなどが挙げられていました。これまで日本助産学会として学術分野、実践分野、国際分野、教育分野で発展してきましたが、これからも継続課題としていかなければならないと考えます。さらに今後は助産師の関連する団体（全国助産師教育協議会、日本助産師

会、日本看護協会、日本助産評価機構)と有機的にそして積極的に連携・協同していくことが必要だと考えています。

この設立 30 周年を機に、これらの課題を整理し、日本助産学会が実現したいこととしての 5 つのビジョン案を学会として提示しています。ビジョン案としては「助産学発展の推進」、「女性と家族を中心とした良質な助産実践の推進」、「助産師、医師、女性のパートナーシップの確立」、「社会貢献の活性化」、「ICMへの参画と国際研究交流の促進」、「日本助産学会の組織強化」、を挙げています。今後、もう少し内容を詰めた上で、会員の皆様にお伝えしていきたいと考えています。

最後に、先人が助産師として立ち上げたこの日本助産学会を一層発展させていくために、助産師だからこそできる研究が増えていくことを強く願います。

最後に、この度第 30 回学術集会において、リンチ氏の招聘講演、シンポジウム、教育講演そして余興「狂言」など多くの記念行事の開催にご協力いただきました我部山会長に感謝申し上げます。

参考「日本助産学会 10 年の歩み」日本助産学会誌 第 9 巻 2 号 (1995)

「日本助産学会設立 20 年の歩み」日本助産学会誌 第 19 巻第 2 号 (2005.12)

第 30 回日本助産学会学術集会報告

第 30 回日本助産学会学術集会会長
京都大学大学院医学研究科
我部山キヨ子



我部山キヨ子第 30 回助産学会学術集会会長

第 30 回日本助産学会学術集会が、2016 年 3 月 18 日 (プレコングレス)、19 日～20 日 (大会) の 3 日間に渡り、京都大学時計台百周年記念館、国際科学イノベーション棟において盛会に開催されました。雨という予想でしたが幸いにも天気にも恵まれ、30 周年記念ということもあり、一般演題 227 題、参加登録者数 1500 名余と、いずれも過去最大数を記録致しました。

学会のテーマである「助産学の今、そして未来へ～最善・最新の助産学構築に向けて～」を反映して、近未来の助産学の進む道を視野に入れた会長講演、特別講演及び招請講演各 1 題、市民公開講座 2 題、シンポジウム 5 題、ワークショップ 3 題が行われ、現在の助産教育・実践・研究のトピックスや課題等が講演されました。開始直後から会場はあふれんばかりの人で埋め尽くされ、どの会場も満員で、会場内は熱気に溢れ、助産師の専門性を確認し、近未来の助産

学を創造するための活発な質疑応答が繰り広げられました。交流集会でもテーマに合わせた論議が行われ、30 年を経過した本学会の成熟をひしひしと感じました。

また、今回初めて Student Midwife Café を開催致しましたが、日本全国 (北海道から九州) から 17 校もの教育機関の参加がありました。いずれの教育機関も教育に独自の工夫がみられ、学生の発表も非常に活発かつユニークで、若さとエネルギーにあふれ、助産学の明るい未来を予感させるもので、非常に好評でした。その中で特に優秀であった 3 校に全国助産師教育協議会から優秀賞 (京都大学大学院高度実践助産学系) と特別賞 (バルナバ助産師学院)、第 30 回日本助産学会学術集会から優秀賞 (日本赤十字広島看護大学助産師課程) が授与されました。

30 周年記念式典は茂山千五郎家の狂言「鬼瓦」に始まり、多くの来賓及び日本助産学会設立に関わった多くの先達のご出席のもとで、厳かに行われました。祝賀会は会場を移して京都大学百周年記念館山内ホールで行われ、日本助産学会の設立・発展に寄与した人々のリレートークを聞きながら全員で当時を忍び、本学会の更なる発展を祈念致しました。

本学会は 30 周年というけじめを迎えました。現在の助産学の発展は我々の多くの先輩の力によって築き上げられたものです。近未来の助産学は、現役の助産師が、そして助産師を志して学んでいる若い助産師学生が築き上げていくものです。今後の助産学の歩みを確かなものとし、大きな潮流としていくために、我々一人一人が担う責務を心に刻み、学会を終了致しました。

日本助産学会 30周年記念行事

日本助産学会30周年記念行事は、3月19日(土)に、京都大学時計台百周年記念館で下記のプログラムに沿って盛大に開催された。

招聘講演

「世界の助産師教育・業務の動向と今後の展望」

演者 Bridget Lynch 前 ICM 会長

座長 片岡弥恵子

記念シンポジウム

「近未来の母子保健の発展のために」

シンポジスト

一瀬 篤 (厚生労働省)

「近未来の母子保健行政の改革と構築」

斉藤しのぶ (文部科学省)

「近未来の助産師教育の構築に向けた現状と課題」

藤井知行 (日本産婦人科学会)

「快適で安全な妊娠・出産のために」

海野信也 (日本周産期・新生児医学会)

「産婦人科医療改革のグランドデザイン」

高田昌代 (日本助産学会)

「日本助産学会の将来ビジョン」

座長：堀内成子 (聖路加国際大学) 福井トシ子 (日本看護協会)

記念式典

記念論文の発表と表彰

葉久真理理事より、30周年記念論文には13編の応募があり、査読者による審査を経た7編の論文(原著6編、総説1編)を評価の後、理事会で審議した結果、「周産期喪失のケアに従事する看護者を対象とした認知行動理論に基づくコミュニケーションスキルプログラムの開発と評価」聖路加国際大学 蛭田明子氏、「熟練助産師の分娩介助における Reflection の探究」元金沢大学医学部附属病院紙尾千晶氏、「東日本大震災直後の施設外出産を介助した医療従事者の体験」宮城大学看護学部 塩野悦子氏の論文が記念論文として採択されたことの報告後、表彰状と副賞が高田理事長より授与された。

祝賀会 京都大学百周年記念館山内ホール於

30周年記念論文受賞者 ～論文誕生秘話～



片岡弥恵子理事、高田昌代理事長
塩野悦子氏、紙尾千晶氏、蛭田明子氏

受賞者 蛭田明子

「周産期喪失のケアに従事する看護者を対象とした認知行動理論に基づくコミュニケーションスキルプログラムの開発と評価」

蛭田明子、堀内成子、石井慶子、

堀内ギルバート祥子

研究者らが主催する天使の保護者ルカの会で、ある日、「慣れた」ケアということが語られた。お話を伺うと、提供されたケアの内容は申し分ない。しかし、看護者の心がない。淡々と、手順にのっとりルチーンのケアが提供されてい

る。そのように母親は感じたというのである。

この話は、ある意味衝撃的であった。周産期に子どもを亡くした母親のケアニーズが示され、施設内で看護手順が整備されてきている状況は喜ばしい。しかし、そのケアは本当に目の前の母親が望むものなのか？今がそのタイミングなのか？改めて立ち止まって考えることが必要なのではないか。こうして、「テイラーメイドなケアの創出」をコンセプトに、「もっと両親とコミュニケーションを！」という思いで本研究のプログラム開発が始まった。

本プログラムの目玉は二つある。その一つがコミュニケーションの **good practice/bad practice** を対比させた DVD である。同じ状況設定で助産師の心のあり方・対応が違ふとケアの展開がどう変わるのか、見て分かるように工夫した。しかし、シナリオで膨らむだけ膨らんだアイデアを、カメラを前に演じなければならぬ。いったい誰が…？私達？最初はその覚悟で挑んでいたが、「リアリティがない」と見かねた業者が破格値で女優さん（の卵）を手配して撮影して下さった。おかげさまで VTR は「引き込まれた」「分かりやすい」と大好評であった。

研究もプログラムも、ここには書ききれない多くの方々の支援と協力で成り立っている。改めて関係者の方に感謝申し上げると共に、今後はプログラムを広く普及させていきたい。

受賞者 紙尾千晶

「熟練助産師の分娩介助における Reflection の探究」

この度は大変光栄な賞をいただき、研究にご協力いただいた母子の皆様、ご家族、熟練助産師の皆様にご心より感謝致します。

私は大学院に入学して間もない頃、一冊の本に出会いました。谷津裕子先生の著書「看護のアートにおける表現—熟練助産師のケア実践に基づいて—」です。読み進めると感動の連続！みるみるうちに熟練助産師のアートをもっと探究したいとワクワクしたのを覚えています。思えばこれまで自分が臨床現場で出会ってきた、魅力を感じる助産師もみんな、何か光るものを持っていた、ただ経験年数を重ねただけではない、何が違うんだろう…そんな小さな疑問から行き

つ戻りつを繰り返し、**reflection** という概念に行き着きました。分析の過程は暗闇にいるような日々でしたが、研究参加者の皆様がみせてくれたものをなんとか形にしたいと無我夢中で進んだように感じます。研究の全過程でご指導いただきました島田先生には感謝の気持ちでいっぱいです。また論文投稿に際して査読者からいただく的確な指摘も、曖昧な部分を1つ1つ明確にするととても貴重な機会となりました。

私は現在臨床も研究も離れ、夫の海外赴任に伴ってドイツで生活しています。助産師という肩書きなしに異国で暮らすことは葛藤もありましたが、貴重な経験ができることに感謝していつか一回り大きくなってまた助産師に戻れたら…と思っています。この度は本当にありがとうございました。

受賞者 塩野悦子

私は震災後、被災地の助産師に聞き取り調査をしていると、病院外でのお産が数件あったと聞き、非常に気になっておりました。震災直後の病院外での出産はマスコミを通して世間に紹介されることもありましたが、それは暗いニュースばかりの中に希望や感動を与えるための記事でした。しかし、助産師としていつ誰がどんな気持ちでどのように対応していたのか、実際に話を伺いたいと思っておりました。ある時、同じ疑問を抱いていた菊地栄さんと出会い、この研究を着手することになったのですが、実行力と突破力のある菊地さんと出会わなければ着手には至らなかったと思います。千年に1度という災害ですから、今後、同じような事態が起きる可能性は低いかもしれませんが、この稀で貴重な体験をまとめるのは今しかない二人で語り合いました。その後、宮城大学から資金を調達し、倫理委員会の承認を得て研究を開始。面接から帰る道中、私たちは何ったばかりの話にいつも感心しておりましたが、データ分析の際、職種のちがう対象者の共通項が見えた時にも、痛く感動いたしました。3名の対象者様には心より深く感謝しております。

平成 27 年度学会賞表彰者

表彰関連委員会 佐藤 喜根子



・村田佐登美氏、橋本麻由美氏、藤田景子氏
高田昌代理事長、青木康子氏、小木曾みよ子氏、佐藤喜根子理事

功労賞 青木 康子

(表彰理由) 青木康子氏は日本助産学会創設に際し、設立準備委員としてご尽力されました。その後は、評議員として9期、理事4期、監事を3期お勤めになられ、文字通り日本助産学会の創設の基盤づくりから後進の助産師育成のために奮闘なさいました。質の高い助産ケアを目指し、助産診断の確立・活用や研究活動の推進、助産学研究者の育成など、常に“「助産」とは何か?”という本質的な命題を追及される研究マインドをお持ちで本学会を牽引してくださいました。

1988年3月には「助産の本質をさぐる」をテーマに、第2回日本助産学会学術集会(東京)を開催され、多くの助産師に“助産の本質”を追求することの重要性を強化し、その後の助産学会の牽引役として、先見的で精力的なリーダーシップを発揮されました。

この様に青木氏は、本学会の創設・運営・発展に多大な貢献をされ、今日の日本助産学会の発展に寄与した功績は大きく、数多くの功労を納められました。

功労賞 小木曾 みよ子

(表彰理由) 小木曾みよ子氏は日本助産学会創設に際し、設立準備委員としてご尽力されました。その後は、評議員として9期、理事5期、監事を1期お勤めになられ、文字通り日本助産学会の創設の基盤づくりから後進の助産師育成のために奮闘なさいました。伝統ある助産師業務の専門性と独立性が古より、どのように維持・継承されてきたのかを丁寧にまとめ上げられ、問題点を抽出しながら、現在の助産師活動の発展に寄与された業績は大変に大きなものが

あります。

1989年3月には「助産の伝統と継承」をテーマに、第3回日本助産学会学術集会(名古屋市)を開催され、当時看護制度改正の動向の中で憂慮されていた助産師免許・教育のあり方を、歴史文化的背景から“助産学の理念”を明確にし、現在の助産学の確立にご尽力なさいました。

2013年には「日本助産学会暦年記録」を編纂し、本学会の活動の継承に多大な貢献をされました。

この様に小木曾氏は、本学会の創設・運営・発展に尽力され、今日の日本助産学会の発展に寄与した功績は大きく、数多くの功労を納められました。

奨励賞 橋本 麻由美

(表彰理由) 橋本麻由美氏は、現在、国立国際医療研究センターの国際医療協力部に所属されており、医療のグローバル化の中で、精力的に海外での助産師育成支援活動を実践されておられます。

諸外国では日本の看護助産や自身の経験や知見を紹介し、当該地域が抱える助産を取り巻く諸問題に取り組むとともに、日本の助産師の魅力と可能性を伝えることにご尽力されました。

また国内においては、WHOの勧告からみた日本における正常分娩のケアの実際を分析し、女性が求めるケアのあり方に一石を投じるなど、常に助産師活動のグローバル化を見据えた活動が高く評価されました。

奨励賞 村田 佐登美

(表彰理由) 村田佐登美氏は、社会医療法人愛仁会高槻病院に勤務され、“患者様の満足する医療”という病院の理念のもと、院内助産システムを立ち上げ、推進する立場から、助産師の実践能力強化に向けた取り組みを実践し、院内助産システムの運用における先駆的な活動にご尽力されました。

周産期医療の危機が叫ばれる中で、助産師が独立して主体的に女性の健康に関わっていく姿勢を、広く社会に示す活動は高く評価されます。これまで院内助産システムに関する普及・啓発活動に力を尽くし、助産実践の発展と普及に果たした貢献が大きく高く評価されました。

学術賞 藤田 景子

(表彰理由) 藤田景子氏は神戸市看護大学大学院看護学研究科博士課程を修了し、現在は金沢

大学大学院医薬保健学総合研究科保健学専攻の助教としてご活躍です。研究テーマは“周産期のドメスティック・バイオレンスに関する研究”や“ウィメンズヘルスに関する研究”と女性支援に直接役立つ研究で成果を上げております。今回の学術賞の論文「ドメスティック・バイオレンス被害女性の回復を促す周産期の助産ケア」

は、DV被害女性と看護者の2方向からの視座で、周産期及び育児期におけるDV被害女性の回復を促すケアの要素を明らかにしています。

これらの研究成果は、助産師の活動範囲を広げるとともに、実践の場での活用が期待されることが高く評価されました。

学術賞受賞論文 ～論文誕生秘話～

金沢大学 医薬保健研究域 藤田景子

この度は、大変光栄な賞を頂き、研究にご協力くださったDV被害当事者の皆様、助産師の皆様にご心より感謝申し上げます。

私がなぜDVの研究に取り組みだしたのか。それは、まだ新人の時分、DV被害うけていたであろう母子に出会っていたにも関わらず、何も支援できずショックな結末になってしまったことがきっかけです。産科は幸せな現場だけではない、様々な思いを抱えながら来ている人も、だからこそ、助産師がアンテナを高くし、関わる必要があると思います、周産期におけるDVの研究に取り組みだしました。

まず、修士論文時には、乳児4か月健診に来られた子どもを連れてきた母親1人1人に質問紙をお渡しし、調査への協力をお願いしました。回収した質問紙には、子どもを抱えながら、とてもひどい暴力を振るわれ必死に生きている様子を記載くださっているものもありました。しかし、私はその場においてもDV被害を受けていることには、全く気付くませんでした。DVの勉強をし、DV被害を受けている方がこの中にいるのかもしれないと思いながら健診の場にいたのに...改めて傍から見ているだけでは気づきづらいことを痛切に感じました。

どうしたら助産師がDV被害女性に気づき支援ができるのか？そこで、まずはDV被害当事者が周産期にどのような経験をされているのか、そして、そこにどのように助産師が関わっているのかを知りたいと思い次に博士論文に取り組

みました。その論文の一部が今回の論文です。

研究協力をしてくださったDV被害当事者の方々の語りはとても力強く、どんどん引き込まれていきました。時には、その語りがあまりに痛烈で二次受傷を負い、理不尽な世の中(加害者)に対して怒りに震え、指導教員に泣きながら吐き出したこともありました。そんな当事者の方々のお話を聞き続ける中で感じたことは、DV被害当事者の方々の生き抜く強さ、そして、被害からの心身の回復には、支えになる人がいたということです。その存在の中に、助産師もおり、助産師の関わりによりエンパワメントされている姿が浮かび上がってきました。一方で、助産師にお話を聞いていく中で、改めて助産師のケアの尊さとDV被害当事者にとっての意義を知り、周産期におけるDV被害者への支援の在り方の示唆を得ることができました。この研究結果を実践に生かすべく今後も発展的に取り組んでいきたいと思っています。

研究協力者に出会い、お話を聞かせてもらうに至るまでは簡単ではなく、支援団体や母子支援施設等々多くの方の協力も得ました。そこで培われた関係性は、今でも私の活動のベースとなり、その後も日々勉強をさせてもらっています。研究のプロセスには、紆余曲折あり、一朝一夕にはいかないことが多々ですが、そのプロセスにはとても大きな意味があり、宝になっています。改めて関係下さった皆様に感謝申し上げます。

平成27年度 研修教育委員会主催 研修会 開催報告

第30回日本助産学会学術集会 プレコングレス4「助産実践と倫理」

研修・教育委員会 ○春名めぐみ 木下千鶴 谷口千絵 堀田久美 松本弘子

3月18日(金) 15:45~17:15 於：京都大学百周年時計台記念館2階国際交流ホール

日本赤十字秋田看護大学学長の安藤広子先生を講師にお招きし、助産実践における倫理的な

価値の相対比および倫理的規準の変化、そして、助産実践の場での倫理的な課題やジレンマの対処法などについてご講演いただきました。

<講演内容の要約>

医療技術の進歩や社会の変化にともない、そ

れらに関わる倫理的な価値や基準も変化してきている。助産師は、社会から認められた専門家であり、倫理観を持った責任ある行動をとることが期待されている。

助産（看護）実践において助産師や看護師は多くのジレンマを抱えている。例えば「同僚のミスを告発すべきか」では、内部告発は法的には義務がないが助産師（看護師）の倫理的義務であり、誰がミスをしたのかではなく、なぜそのようなことが起こったのかを分析し、予防に活かすことが大事である。

倫理的態度のための要件としては、倫理的感受性（状況に対して関心をもつ）、状況把握（できるだけ多くの正しい情報を集める）、倫理的判断（情報に基づいて、よりよいと思う行ないを考える）、倫理的実践（その行いを実行に移す）、倫理的責任（その行いの結果に対して責任をもつ）がある。グループで行う倫理的問題の症例検討の目的は、①現実の看護実践を振り返り、日常実践における倫理の存在を知り、関心をもつ、②倫理的な洞察を深める、③専門職としての役割、責務、アイデンティティを認識することであり、重要なのは検討した結果を実践につなげ、倫理的感受性や倫理的マインド(ethical-mindfulness)を高めていくことである。

参加人数は91名(会員40名、非会員51名)で、当日のキャンセル待ちが出るほどの盛況ぶりでした。今回の講演は、助産実践能力習熟段階(クリニカルラダー)レベルⅢ認証申請に活

用可能な研修でもあり、前後に小テストを実施して知識定着を個々に確認しました。参加された方からは「助産師として責任ある行動をとるために、日々、倫理的な視点をもっていきたい」「道徳心を向上させていきたい」「自分の倫理観やジレンマについて考えることができた」等々、たくさんのご意見をいただきました。助産実践における倫理について理解することは、助産師として必須であり、その対応能力も今後さらに必要となってきます。

臨床での倫理的問題を検討する際に、今回の研修で学んだことを是非役立てていただきたいと思います。



会場の様子

日本助産学会 国際委員会より

国際委員 小黒道子

1. ICMプラハ総会での採択文書の紹介～戦略的指針等を新たに作成～

国際助産師連盟 (International Confederation of Midwives : ICM) は、2014年の ICM プラハ総会で採択された下記の文書を発行しました。

■ 2014～2017年 戦略的指針

ICM とその会員団体が、ミレニアム開発目標で未達成の課題と、性と生殖に関する健康と母子保健に関する 2015 年以降の課題に取り組む基盤となる戦略がまとめられています。

■ 助産カリキュラム対応ツール

助産師養成機関が、自校のカリキュラムと ICM の定める基本的助産実践に必須のコンピテンシーがどの程度対応しているかを確認するためのツールです。

また、ICM 発行の下記の基本文書等も改訂されました。

- 助産師の倫理綱領
- 女性および助産師に関する権利章典
- 哲学および助産ケアのモデル
- 基本的助産実践に必須のコンピテンシー
- 定款
- 細則

これらの文書は、3～6年毎に ICM 総会国際評議会で見直しが行われています。今回は、2014年のプラハ総会で見直し、採択された文書です。これに伴い、本会を含め日本看護協会、日本助産師会、全国助産師教育協議会で翻訳作業を進めてまいりました。すべての文書の日本語版が日本助産学会のホームページにアップされています。どうぞご確認ください。

2. 第31回 ICM 3年毎大会 (カナダ・トロント)

第31回 ICM 3年毎大会が、2017年6月18日から22日にカナダのトロントで開催されます。テーマは、Midwives—Making a Difference

in the World(助産師は社会を変える)、です。過去3回の大会における演題登録数(Glasgow - 1500 前後; Durban - 1300 以上; Prague - 1360)を大幅に上回り、3月31日の締め切りまでに1630以上の一般演題が提出されました。査読結果は7月1日までに連絡されます。既に特別割引価格(bonus discount)での登録や抄録の締め切りは終了していますが、早期割引

(early bird : 助産師 \$ 975 ; 登録時に資格取得後5年未満の助産師 \$ 775 ; 助産学生 \$ 475、すべてカナダドル)での登録は、2016年3月1日~2017年2月28日まで受け付けています。プログラムを含め、詳細は大会のホームページをご参照ください。

<http://www.midwives2017.org/>

近藤潤子先生(天使大学大学院助産研究科 特任教授)が山上の光賞を受賞されました
広報担当理事 毛利多恵子

近藤潤子様(天使大学大学院助産研究科 特任教授)は、第2回山上の光賞(さんじょうのひかりしょう)、看護・保健部門で受賞されました。おめでとうございます。

「山上の光賞」とは?

(山上の光賞のホームページより抜粋)

日本の広範な健康・医療分野において素晴らしい活躍をし、よりよい社会を築くことに貢献している75歳以上の方々を顕彰するプログラムです。高齢を迎えてなお、その豊富な経験、知性、そして知識を駆使しながら、後に続く世代の歩むべき道を照らす「山上の光」として活躍を続けておられる方々を顕彰することにより、更に多くの日本のシニアを勇気づけ、活発な社会の一員として活動し続けることの素晴らしさを伝えることをこのプログラムは目指しています。

全国から募集する候補者の選考は、本プログラムの共催団体、事務局からは独立した審査委員会によって厳正に行われます。「山上の光賞」の審査基準は以下の通りです。候補者はこのうちひとつ以上の項目に当てはまることを期待されます。

- 高潔な人格
- 組織における卓越したリーダーシップ
- 特定の領域におけるニーズに応え、健康・医療の促進に大いに貢献する業績を有する
- 医療サービスの提供における大いなる貢献
- 創造力豊かなアイデアで既存のプログラムの大幅な伸展に貢献した実績
- 健康・医療の分野における斬新なアプローチの導入
- 健康・医療に関わる諸分野での研究における飛躍的な成果(ブレイクスルー)
- 公衆衛生の促進への貢献

2017年度 日本助産学会 研究助成公募予告

学術振興委員会委員長 葉久 真理

日本助産学会では、本学会の会則に基づき、助産学に関する研究を推進するために研究費用の一部を助成し、助産学の発展をはかり、わが国の母子保健に寄与することを目的に研究助成を行っております。

2017（平成29）年度の研究助成申請では、助成額と件数、研究期間が変更されました。

助成額と件数

助産学の発展、助産実践の改善と開発、その他母子保健領域の学術的研究等。

助成金額は2種類あります。

- 1) 助成金額が、1件あたり100万円以内。
1件程度採択
- 2) 助成金額が、1件あたり30万円以内。
3件程度採択

助成期間

研究者への助成期間は、原則として2年間とします。

応募資格：変更なし

日本助産学会員として2年以上加入している会員であること

研究分担者は会員であること（加入年数は問わない）

申請書の請求

公募案内は、本年7月初旬に、日本助産学会ホームページ「研究助成案内」に掲載いたしますので、ご準備のうえ応募くださいますようお願い申し上げます。

問合せ先

一般社団法人日本助産学会事務局

〒170-0002 東京都豊島区巢鴨1-24-1

第2ユニオンビル4F

（株）ガリレオ 学会業務情報センター内

TEL：03-5981-9826 FAX：03-5981-9852

E-mail：g019jam-mng@ml.gakkai.ne.jp

2016年度助産実践能力習熟段階（CLoCMiP）レベルⅢオンデマンド研修を開始

CLoCMiP研修は、日本看護協会が開発した助産実践能力習熟段階（クリニカルラダー）（Clinical Ladder of Competencies for Midwifery Practice、以下CLoCMiP）を、ステップアップするために必要な知識編の学習コンテンツです。

申し込期間：平成28年5月9日（月）10時～

平成29年2月14日（火）10時

配信期間：平成28年5月12日（木）10時～

平成29年2月28日（火）23時59分

詳細は、日本助産学会ホームページをご覧ください。

ICM 募金の御礼と継続支援のお願い

一般社団法人日本助産学会事務局

ICM 支援のための募金を常時受付けております。

引き続きのご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。

☆ICMスポンサー・ア・ミッドワイフ（国際基金）☆

発展途上国の助産師の参加用援助としての募金です。

一口 2,000円

振替口座番号：00190-8-710931

加入者名：日本助産学会国際基金

☆ ICMセーフマザーフード基金 ☆

世界で妊婦死亡率・罹病率が最も高い地域における助産知識の発展を支援する募金です。

一口 1,000円

振替口座番号：00240-8-6818

加入者名：日本助産学会ICMセーフマザーフード基金

事務局からのお知らせ

一般社団法人日本助産学会事務局

今年度平成28年度会費(10,000円)納入について

本学会は、皆様の会費をもとに運営しております。円滑な事業推進のため、会費納入がまだお済でない方は早急に下記まで、氏名・会員番号等を通知の上、お振込みをお願いします。

・郵便振込：00120-2-763540

加入者名：一般社団法人日本助産学会

通信欄に会員番号と納入年度を明記

・銀行振込：ゆうちょ銀行(9900)

〇一九(セイフキョウ)店(019)(当座)0763540

一般社団法人日本助産学会(シャ)ニホジヨサカガッカイ)

氏名と会員番号を通知してください

学会誌投稿(共同研究者含)、学術集会演題応募(共同研究者含)、研究助成応募(研究代表者)等は、会員で該年度の会費納入済みが条件になります。応募される場合は、お早めに会費納入をお済ませの上、お申し込み下さい。また、会費納入が遅れますと学会の諸情報の送付が滞りますのでご注意ください。

なお、納入会費の領収書発行に関してはお手数ですが事務局宛にメールかFAXでご請求ください。

会費納入・会員番号等に関してご不明な時は、事務局までお問い合わせ下さい。

変更届について

住所等の変更に関しては、オンライン会員情報管理システム(詳細は下記)で変更手続きが出来ますのでどうぞご利用下さい。以下のホームページからID(会員番号)とパスワードをご入力の上、ログインいただき、ご希望の手続きを行ってください。

オンライン会員情報管理システム：

https://service.gakkai.ne.jp/society-member/aut_h/JAM

ID・パスワードがご不明の場合は事務局宛お問い合わせ下さい。

オンライン会員情報管理システムがご利用になれない場合は、変更届の書式は問いませんが必ず書面(E-mail・FAX・はがき等)に明記して、その都度お早めにお知らせください。本学会ホームページからも「変更・退会届」の書式がダウンロードできますのでご利用ください。

変更届は必ずお出しください。学会誌等が届かないような場合は事務局までご一報ください。

退会届について

退会届の書式は問いませんが、書面(E-mail・FAX・はがき等)でお知らせください。本学会ホームページからも「変更・退会届」の書式がダウンロードできますのでご利用ください。

*次年度から退会希望の方は、必ず1月末までに退会届け出をお願いします。退会連絡がない限り会員継続となり、年会費をお納めいただくこととなります。特に口座引き落としご利用の方で退会希望される方はご注意ください。ただし、会費引き落とし後の退会の会費についてはお返しできません。ただし会費納入年度の学会誌等は送付しますので、十分にご理解いただきたくよろしくお願い申し上げます。

学会誌バックナンバー等の販売のお知らせ

日本助産学会誌バックナンバー第20~28巻は2,500円ただし26巻2号別冊の[エビデンスに基づく助産ガイドライン]は3,000円、29巻は3,500円(各1部)。日本助産学会暦年記録は、1部3,000円。送料は申込者負担です。

在庫に限りがありますのでご希望に添えない場合はご容赦願います。

申込み方法は、本学会ホームページから申込書をダウンロードして希望を記入の上事務局宛にE-mail添付送信するか、FAXしてください。

一般社団法人日本助産学会事務局

〒170-0002 東京都豊島区巣鴨1-24-1 第2ユニオンビル4F

株式会社ガリレオ 学会業務情報センター内

TEL:03-5981-9826 FAX:03-5981-9852

E-mail: g019jam-mng@ml.gakkai.ne.jp

ホームページ: <http://square.umin.ac.jp/jam/>

円滑な事業推進のため、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます